

Title	俯瞰的視野と多様性理解の重要性 : 総合討論
Author(s)	
Citation	GLOCOLブックレット. 2009, 2, p. 60-74
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48281
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

俯瞰的視野と多様性理解の重要性 —総合討論—

宮本和久 それではプログラムに従いまして全体討論会ということでこれから一時間、フロアの皆様のご協力をえて進めていきたいと思っています。

最初に基調講演ということで味埜先生の方からサステナビリティ教育に関する全般的なお話、あるいは東京大学における具体的な実践例をご紹介いただきました。最後にそれをベンチマークにするということでしたが、私も大阪大学においても、連携教育、サステナビリティ教育のみならず人間の安全保障を目指した文理融合型の教育プログラム、あるいは、味埜先生のお話にもありましており学融合プログラムというのを構築していかなければならない、そういう状況にあるわけです。そういうことを中心にこれから討論を進めていきたいと思っています。

その前にコメンテーターとしてグローバルコラボレーションセンターの栗本教授、同じくグローバルコラボレーションセンターの峯准教授のお二人にも参加していただいております。討論にはいる前にまずこの二人の先生からコメントをいただきたいと思っています。まず栗本先生の方からお願いしたいと思っています。

栗本先生は我がグローバルコラボレーションセンターのセンター長として、いま現在センターを導いておられます。先生は現在、大阪大学大学院人間科学研究科基礎人間科学講座人類学研究分野の教授をされておられます。簡単に略歴を紹介させていただきますと、1980年に京都大学文学部を卒業され、

その後引き続き大学院に進まれました。大学院をでられてから東京外国語大学、国立民族学博物館等をへて、2000年から大阪大学助教授、さらに教授として活躍でございます。主な研究分野というのは、人類学をベースにして南部スーダンにおいてバリ人の民族誌的な調査、あるいはエチオピアにおける調査などアフリカを中心にした研究を進めてられました。今日のお話のなかにありましたように、サステナビリティ教育というのは非常に多様であるということがございますので、その多様の一環といえますか、文系の文化人類学の立場からサステナブル教育をみた場合どういうふうになるかということも含めてお話いただけましたらと思います。よろしくお祈りします。

栗本英世 GLOCOLの栗本です。お三方のご発表についてコメントというよりは感想になるかと思いますが、順番にお話しさせていただきます。一番最後にきいた方から始めさせていただきます。

住村先生の果菜園のお話は、ローカルな多様性の重要性を表わす典型的なお話の一つ



ではないかと思っています。ベトナムの農村の人たちが日常的に利用している有用植物に対する知識とその数というのは大変なものだと思います。ベトナムの場合はおそらくそうだと勝手に想像するんですが、私自身のスーダンやエチオピアでの経験からいいますと、こういった屋敷があってその周りに果菜園があって、そのさらに外側に畑があったりするわけです。ベトナムでいわれている果菜園のさらに外側にも、こういう有用植物がたくさんある場合が多いです。つまりその外側というのは人為的に攪乱された自然のあるところで、攪乱の原因は畑地に使用したり、あるいは建材のために伐採することです。

純粋な手付かずの自然ではなくて、人為的に攪乱された自然というのが、村の周りに広がっている。そこはいろんな食用、薬用の有用植物の宝庫であるわけです。それは通常、雑草といわれているわけですが、雑草のなかに人間の役に立つものが非常にたくさんある。ということは逆にいいますと、人里離れた深い森のなかやあるいは遠いブッシュのなかだけにこういう有用植物があるのではなくて、実は身近なところにあるということです。日本でいいますと里山などがこれに相当すると思います。里山の近くにいきますと、田んぼのあぜ道なんかには食用になる野草がいっぱい生えていたりするわけです。これは長年にわたって、人間と自然の相互作用の結果形成されたいわばサステナブルな自然環境です。人の手が入った自然環境の一つの良い例ではないかと思っています。

住村先生の話のポイントはこういった一見括弧付きの伝統的にみえるような屋敷周辺の果菜園というのが、歴史を振り返ってみると、社会主義時代の部分的な自由化政策の結果盛んになってきたものかもしれないという指摘です。あるいは近年のベトナムの経済の自由化にともなう近代化というのか、広くいえばこれもグローバル化の一つの側面だと思えますが、ライフスタイルの変化にともなう、こういった伝統的なシステムが再評価、再注目されているところが重要なポイントではないかと思っています。

最近の日本ではフードセキュリティといいますが、食の安全保障の問題が非常にマスメディアをにぎわしているわけですが、おそらく近代化が進みつつあるベトナムでも現在の日本と比べると、ずっと食料の安全保障度は高いのではないかと思っています。経済的にはベトナムは途上国で日本は先進国ですけれども、その先進国である日本の我々が途上国から学ぶべきこともたくさんあるということです。

2番目の石井先生のお話に移りますと、私がお話をおうかがいしてまして、単純に思いましたのが、省エネや省資源ということばがありますけれども、それとサステナビリティはどう違うのかなということです。サステナビリティというのは省エネや省資源のことだと理解していいのかどうかということをもまずお尋ねしたいと思っています。

もう一つ私が考えさせられましたのは、経済的な成長と生活水準の維持とサステナビ



リティという三つが併存することができるかということ。単純ですけど乱暴な議論をすると、現在の我々が車を使うことをやめる、あるいは車の生産や使用を大きく規制する。あるいはビニールやプラスチック製品の生産や使用を大きく規制して、我々の生活の水準を30年前か40年前に戻すことができるとしたら、地球環境に関する多くの問題は解決するわけですね。しかしそうすると、経済成長はマイナス成長になってしまいます。生活水準はかなり下がるわけです。ですからこれを言い換えますと持続的な経済成長と持続的な社会というものが両立できるのかなという素朴な疑問を感じましたので、お尋ねしてみたいと思います。

一番最初の味埜先生のご発表は、大阪大学で教育プログラムの開発をしていかなければならない我々にとりまして、たいへん参考になりました。人間の社会や文化について研究している我々にとって非常に刺激的であったのは、サステナブルな社会はスタティックではなくてダイナミックであるということ

です。社会に対する動的な見方が刺激的かつ重要であると感じました。ということはサステナブルな社会を我々が理解するときに我々自身も静的ではなくて動的な視点をもたないといけないということでありまして、ダイナミズムというのをいったいどういうふうにとらえて理解していけばいいのかという方法論や認識論の問題になってくるわけです。さまざまな面での多様性というのがダイナミズムを支える重要な要因であるというご指摘も、社会科学を研究しているものにとって大いに納得のできる考えだと思います。

もう一つ印象に残りましたのは、全体像を俯瞰するということです。現在の世界を認識する視点のあり方です。これもグローバル化の時代である現在の世の中、世界に生きている我々にとって、全体像をとらえようとするのは大事な生き方だと思います。先生は日本の特殊性ということを強調されました。本当はそうではないと思いますが、日本に暮らしていますと日本の外で何がおこっているのかということに、あまりリアリティをもって感じ

なくても生きていくことができなくはないのです。そういった日本の状況のなかで世界の全体を認識する視点というのは、いったいどうやって獲得していったらいいのか。我々大学の教員が特権的な立場にたっているというわけではないのですが、我々は学生の皆さんよりは長く生きてきているんな経験をしているので、より全体像に近いものを学生、院生の皆さんよりはみているかもしれないです。それを教育上若い人たちに伝えることができるのかなということを考えさせられました。

これは味埜先生のご発表に対するあげ足とりとなっては失礼かもしれませんが、先生は現状にとらわれずに全体像を俯瞰することが重要であると先ほどの発表でおっしゃっていたと思うのですが、私は、これは人類学者としての発言かと思いますが、現状にとらわれつつあるいは現状にこだわりながら、研究者も学生もあるいは一人の人間として地べたを這いずり回りながら—これは、比喩的でも直接的な意味でもあります—同時に全体像を俯瞰するまなざしというのを獲得していくことが、サステナビリティ教育にとって非常に重要だと思いました。長くなりました。以上です。

宮本 どうもありがとうございました。ただいまいくつかの質問が投げかけられましたけど、それはまたのちほどポイントをしばってご回答いただけたらと思います。

引き続き峯先生の方からコメント、感想等をいただきたいと思います。峯先生は栗本先生と同じく京都大学の文学部を卒業され、そ

のあと同大学の大学院経済学部研究科に進まれたということです。研究テーマも開発経済学、アフリカ地域研究という分野で現在、活躍しておられます。とくにアフリカにおける人間の安全保障と開発協力ということで、いま現在GLOCOLが関わっておりますJICAの研修プログラム等においては中心的な立場でご活躍でございます。経歴をいい忘れましてですけど、大学院をでられてから中部大学の講師、助教授、それから南アフリカ共和国のステレンボッシュ大学の助教授、さらに中部大学教授、大阪大学人間科学研究科助教授をへて、現在大阪大学のグローバルコーポレーションセンターの准教授をしておられます。峯先生よろしくお願ひいたします。

峯陽一 私も石井先生、住村先生のお話に簡単にコメントしてから、味埜先生のテーマについて議論させていただこうと思います。石井先生がおっしゃったのはサステナブルな社会もダイナミックに変化する、そういう環境制約のもとでイノベーションが可能であり、実際に取り組まれているという興味深いお話だったと思います。住村先生のお話は多様性、食の教育、栄養の教育に関するもので、味埜先生のお話と密接に関係していたと思うんですけれども、いまお尋ねしたら、住村先生は学生をつれて現地調査もおやりになっているそうです。このへんは味埜先生がお話しになったスイスでのY.E.S.の試みがございませうけれども、アジアの山村で滞在型の実践的なワークショップを、学生を含めて教育活動としてやっていくのもとても面白いんだ

らうな、と思いながらお話をきかせていただきました。

味埜先生のお話を興味深くおききしたので、続けて、それに関連することをお話させていただこうかと思えます。私が関わっておりますのは人間の安全保障、ヒューマンセキュリティの考え方でございまして、その視点からサステナビリティ学教育に少しコメントしたいと思えます。

一般にサステナビリティというと、工学部の人々が環境のことをやっているのだからという理解ですね。他方、人間の安全保障というと、国際関係論とか政治学の人々が紛争のことをやっているというのが普通の理解ではないかと思えます。ただ実際には、味埜先生がお話しになったとおり、サステナビリティには社会や経済のサステナビリティも含まれるという意味では学際的なアプローチそのものですし、人間の安全保障も、そもそも恐怖からの自由と欠乏からの自由を組み合わせたという前提で出発したものですので、これも学際的な概念だと思えます。この二つの概念がいったいどう違うのかといえますと、栗本先生の先ほどのお話を引き継ぐのですが、サステナビリティというのはシステム論ではないかと思えます。つまり俯瞰的にシステムの持続可能性をみていくことだと思うのです。人間の安全保障は実は同じことを別の見方でみているような気がするのです。というのは、システムの構成要素に不安全や不安、インセキュリティを強いるようなシステムはサステナブルではないという意味ではまった

く同じことだと思うんです。

何が違うかといえますと、人間の安全保障はダウンサイドリスクに注目します。これは紛争であったり、政治弾圧であったり、感染症あるいは環境破壊であったり、経済危機だったりします。こういうリスクの発現のもとで、一人一人の人間はどのようなインセキュリティを経験しているのか。そこから出発してシステムのサステナビリティに下から光をあてていくようなアプローチが人間の安全保障ではないかという気がするのです。これは鳥瞰図的、俯瞰的というのではなく、地面からシステムに光をあてる。ただし、究極的には同じことであり、同じことを別々のアプローチで追及していくという構図で理解すべきではないかと思うのです。

問題は、インセキュリティがときとしてコンフリクトに対応することです。つまり、特定のグループや特定のコミュニティのセキュリティを高めることが、別のコミュニティのインセキュリティを高めてしまうという構図が、いまの世界にはたくさんあると思うのです。これは冷戦の時代、国際政治学で議論されていたセキュリティジレンマの構図を想起させます。セキュリティジレンマというのは、2つの国があるとして、相手の国が嘘か本当かわからないけど軍拡しているように思えます。そこでわが国も軍備を拡張する。それをみた相手の国がこれは脅威だということで、また軍備を拡張していくと、それをみたわが国がまた軍備を拡張していく。こうやってスパイラル的にシステム全体が不安全になっていきます。

何かの偶発的なきっかけで核戦争のボタンがおされかねないという構図が、「囚人のジレンマ」の一つのケースとして、セキュリティジレンマとして分析されていたことがありました。

これは冷戦時代の国と国の関係に限らず、あらゆる集団の間にいえることだと思うんです。例をあげていいますと、中国で餃子の農薬の話とかがあって、けしからんという話になっています。3年前には中国で反日暴動がおきました。私が前にいた私立大学で指導していた中国人留学生が、名古屋の中華料理店でアルバイトをしていました。そこで中国語をしゃべっていたら、日本人の客から怒鳴りつけられました。中国語をしゃべっていたというだけの理由で、脅迫的にいきなり「お前、中国に帰れ」といわれてしまいました。なかなかたくましい学生で、彼女は修士論文はこれで書こうと思ったわけです。中国の反日ブログと日本の反中ブログを、彼女は両方読めるので、それぞれどういうふうなディスコースになっているかを調べたわけです。面白いのは、キーワードを入れ替えるとほとんど同じようなロジックで、ほとんど同じような議



論をしていることがわかりました。これも一つのセキュリティジレンマの事例ではないかと思うのです。

日本と中国だけではなく、あらゆる国際関係のなかで、そして多様な「自己」と「他者」の関係のなかで、同じようなことがあると思うんです。他者が自己のセキュリティに対する脅威だと感じてしまう。そういうふうには認知したところからどんどんコントロールがきかなくなり、プロセスが暴走していく。こういうヒューマンインセキュリティの状況をどうやって「常態」に引き戻したいのかということに、大事になってくるのはリーダーシップだろうと思えます。これに関して、味埜先生のお話のなかで非常に面白いと思ったのがY.E.S./IPoSでの教育の手法です。

方程式の解は一つしかないという学生に教えるものだと刷り込まれている教師が多いと思うんですけれども、前回の文理融合ワークショップ[※]でお招きした村上陽一郎先生は、『安全学』という本の最後のところで、均衡解というのは複数あることがあるんだと、大事なのはそれを選択していくプロセスが大事なんだと言っておられます。これが、広い意味での民主主義だと思います。何でも知っている教師が学生をコントロールするのではなく、プロセスをしっかりと観察しながらプロセスに寄り添って導いていく、そういう教師の役割が求められているのではないかという気がするのです。インセキュリティのジレンマがどんどん暴走していくのを緩和するようなステークホルダーの合意を、どうやってつくっていく

べきか。共通の価値をつくりながら多様性をしっかり保持するという考え方を身につけたリーダーシップというのは、これからもっと必要になってくるんじゃないかと思うのです。こういう意味でも、味埜先生のお話をとても興味深く感じました。

関連して、教育のことをもう一点だけ申し上げておきます。大阪大学でRISSがすでに教育プランを全学的に走らせていて、これからGLOCOLも開発していきます。高大連携だけではなくて地域の初等中等教育との連携も大事だし、生涯教育も大事だと思うんですけども、基本的には大学のなかでどういう教育をするかというのが大事だと思うんです。そこで高度教養教育という枠組みがございしますが、これはある程度専門技術を身につけた大学院レベルの学生に対して、きちんと社会に出る準備をしてもらうような教育です。サステナビリティとかヒューマンセキュリティといった枠組みは、個別に深い技術や知識を身につけるという人であっても、大学院レベルで学んでいくべき共通テーマにふさわしいのではないかと思います。

学際教育症候群と私はいうのですが、いろんな学際的な大学院がありますよね。先生たちはだいたいどこかの研究科で専門的な博士号をとっています。そして、専門的な研究を深めていくうちに、他の分野と協力して研究することの大切さがわかり、その方が予算もとやすいことがわかります。ところが、そういう学際的な大学院に入ってくる学生はというと、専門的な力が弱いことが多いものです。

いろんな料理をしたいのに、包丁が切れない。で、学生はアイデンティティクライシスにおいて、何を勉強しているのかわけがわからなくなっていく、というのはよくある話です。結局はバランスが大切なのだろうと思います。つまり、自分の個別の技能をきちんと身につけながら、同時に大きな問題意識をもって、かつ前例がないような状況でも、人びとをまとめあげてリーダーシップを發揮できる。そういう人材が求められているのではないかと思います。

宮本 ありがとうございました。3人の先生方の講演に続いて2人の先生から焦点をしばってコメントをいただきました。次はフロアの皆さんから先生方のご講演に対する個別の質問あるいはご意見をいただきたいと思いますが、その前に私から一つ石井先生にお願いがあります。

石井先生はずっと産業界でご活躍されて、大学にうつられたのは、つい最近です。そういう意味で、産業界からみた大学ということでコメントしていただきたいと思います。私自身は工学部畑でして、ここ数年、産学連携というのがいわれていますけれど、大学の研究成果は技術というものがでていくものではなくて、ましてや製品が目の前にできてくるような捉え方はできないと思っていました。先ほども脱硝・脱硫装置のお話のなかでマーケティングの重要性というのがいわれていたんですが、とくに大学のなかには、本日のキーワードであります多様な研究分野があるわけですから、単に工学部の研究成果だけではなくて、

他の分野の先生方の協力もえていっているような開発をしていく必要性をいわれたのではないかと思います。いかがでしょうか。

石井 先ほどのアンモニアで肥料をつくるというのを題材に出したかったのは、私どもの企業が苦勞してきた道ですけれども、中国という土地で概念としてあるべき技術という意味では、排ガス処理してそれによって有価物ができるとしたらいい技術だなと思うわけですけれども、それを適用するといったときに、中国において、私も知らなかったんですけども、肥料をつかう文化がないです。最近になって日本の食料のマーケットがあるから肥料をつかうようになってきたんですけども、私どもがデモンストレーションプラントをつくる時にはそういうことをまったく知識としてなかったです。ただ頭のなかで石炭をどう燃やすか、排ガスをきれいにしたい、肥料がきつと役にたつだろうと頭のなかで考えてもっていったというのは事実なんですけれども、実際にやってみると経済的に非常に問題ができました。電力とかアンモニア代とかが高くなるのと同時にできた肥料が高くて売れません。二重苦三重苦ですよ。技術的な面だけではなくて、技術が定着するには文化とかそういったことも調査が必要だと申し上げたかったということです。

宮本 ありがとうございました。

石井 栗本先生から省エネ、省資源とサステナビリティの話があったと思いますが、私はサステナビリティ社会が実現するためには省エネ、省資源は必要条件だと考えていま

す。それができたからできるということではないと思いますが、必要条件で技術革新が当然必要だろうと思っています。いまの電力消費量が半分になるような、そういう技術開発が必要だと思っています。

宮本 他の方、また違った視点からコメントいただけたら、どうぞ。

小泉 大阪大学の小泉です。興味深いご発表をいただきまして、どうもありがとうございました。味埜先生の様々なご指摘について、私も同感するところとか、味埜先生の言葉づかい、優れた表現に感じたところはたくさんあったんですけども、とくに私にとって共感するのは、お話にでてきた順番にいきますと、マイノリティへの配慮ということであるとか、体験的理解ということであるとか、知の構造とか、リーダーの教育であるとか、文化の多様性、私も含めて人類学者が言いそうなことですけれども、価値規範、文化の多様性が減少していくということをどう評価するかという問題であるとか、自分の知らないもの、新しい感性に触れる機会をこれ以上減らさないという考え方とかです。ローカリティとコモンズという興味深い対比、俯瞰的思考・思想といったようなキーワードです。それぞれが私にとって大変重要なことだと感じられました。

一つだけ質問があります。教育カリキュラムをつくってこられて、発表の中でカリキュラムのことについて具体的な科目名等をあげられています。知識概念習得型の科目群という形と実践型の演習科目群という、知識と実践

と対比した巧みなカリキュラム構成と思いますが、ここにご報告いただいたようなカリキュラムの完成度といますか満足度といますか、100パーセントぐらいと考えてもいいようなものと評価しておられるのか、それとも最初の段階の仮のもの、ステイブルではありえなくてダイナミックに動いていく種類のカリキュラムであるのか、現実的な条件のために教員がいないということで足りない部分があるとすればどのようなところなのか、あるいはこれから強化していきたい部分はどこへんの科目類なのかといったことについてコメントいただければと思います。

味莖 ありがとうございます。最後に質問としておっしゃられた件に関してまず最初にお答えしたいと思います。いまの私どものカリキュラムというのは最終的に思い描く姿からみると、まだまだ手前の段階にあります。最終的に思い描く姿をどうするかということもまだ議論の最中だということだと思います。ただいくつか私がお話のなかで申し上げましたキーワードで、俯瞰型、全体像をみるような能力を身につけるための知識の習得というのがありますが、これは私の話のなかでも申し上げたんですが、いくつか俯瞰型の知識習得のために新たに設計した科目というのがあります。一つはオムニバス型で、以前からやっていたサステナビリティ論もそうなんですが、それだけではつながりが見えないということがありまして、そういうことを意識してつくった科目を二つ用意しています。これはまだオファーされていまして、今年の4月

から最初にオファーが始まるのでこれの内容に関しても担当している先生といま相談している段階です。

実践的ということばに関連して、システム思考とか多様性の理解とかいろんなことを申し上げたんですが、具体的な課題をつくって演習のかたちで学生にやらせていくということを想定して、我々の手で新しいかたちでつくった二つの演習科目のなかに入れていきます。去年の10月から初めての演習をやってやっと半サイクルがわったところなんです。先ほど申し上げたように日本の過去の環境問題の経験からいろんなことをもってくるとか、もう少し大きな視野でみるという意味では、サステナビリティインディケータ（持続可能性評価指標）といわれているようなコンクリートとかいうものを理解することと導入された背景を学生に考えてもらいます。学生の多様性が高いと面白い議論ができる可能性があるんですが、まだ人数が少ないのでそこまではいっていないというのが現状です。いまの時点では構想として私が申し上げたような要素をうける受け皿はそれなりにつくってはいるんですが、中身を具体的に整備していくというのはまだまだこれからだというふうに思っています。

宮本 いまの質問に関連してですが、各大学の資源、環境に応じて独特のプログラムをつくっていく必要があるというようなことをおっしゃったと思うのですが、それに関連してYES/IPoSのプログラムの日本人参加者のバックグラウンドはどういうところでしょう

か。どういう学部から参加しておられますか。**味莖** 募集をするときのスタンスとしては、できるだけいろんな分野の人に来て下さいということをお願いしています。現実には多様な分野からきてくださってはいるんですが、声をかけるルートが私から声をかけると知り合いの先生が多いとか物理的な制約もあって、現実には文系の学生が少ないです。ゼロではもちろんなくて、文系の学生は2割ぐらいです。現状ではそんな感じです。

こちらの基本的な方針、考え方としては、実際に学生を選ぶときにも分野がなるべくたくさんるところからきてもらえるように、学生に応募していただいて面接をしたりいろんなことをやってセレクションをして最終的に決めているんです。IR3Sの大学に対しても2人ずつ送って下さいということをお願いしているのですが、その2人のなかでは男性、女性とか日本人、外国人とか、分野も文系、理系とかダイバーシティがなるべく高くなるように配慮して下さいをお願いしています。それが実現できるとグループのなかでディスカッションさせるときには、学生のもっている多様性をつかっているんなことができるということになりますので、私どもとしてはそういうところを大事に考えています。現実にはその方針で集めています。

宮本 留学生に関しても同じような方針ですか。国とか、専門分野とか。

味莖 そうですね。

先ほどいくつかご質問とコメントをいただきまして、私自身も興味深く聞かせていただ

いたんですが、とくに面白かったのが栗本先生のコメントです。私の方は現状にとらわれずに考えなさいと。それに対して地べたを這いずり回りながらという表現をつかわれたと思うのですけれども、それが大事だと思います。サステナビリティ学の考え方として私が申し上げたのが俯瞰的にみなさいということをお願いしました。それに対して峯先生からはヒューマンセキュリティのほうは、人間がインセキュリティにさらされたときにどうするかという下からの視点が中心になっているということです。これは同じようなニュアンスのご指摘かなと思ったんですが、こういう議論がでてくるから多分野というのは面白いんです。

例えば地べたを這いずり回りながらというのは、私も学生にやれやれといっているわけです。カリキュラムのなかでも実際にアジアということを重視しているわけですから、アジアに出向いていってあるいは日本のなかの現場に出向いていってやりなさいということを計画としてはもってまして、ただお金がかかるので、それはちょっと別の問題なんですけれども、ひじょうに重要だと思っています。それがないと議論の出発点がみつけれないといえますか、本当に何がやらないといけないことなのか、人間にとってどういうことが重要なかわからないわけです。その感覚をもつというのは大事だというのはそのとおりだと思います。そのことを否定しているわけではないのです。

実際に対処すべき現場というのを理解して、次にどうするかというときに、そこだけ

みてはいけません。とくに自分のバックグラウンドの工学系というのは、問題をまずみつけて、みつけたらしめしめと解決しようとしているやるわけですが、そういう発想ではだめだということをお戒の意味もこめて思っています、先生がおっしゃったように両方の見方が必要なんだと思います。

峯先生がおっしゃっていた上からの見方、下からの見方ということであると、サステナビリティと省エネがどう違うかという話がありましたけれども、これを上からの見方だけでぱさりと切ると、こういうふうになると思います。

人間のアクティビティというのは高過ぎることがいわれています。だからエネルギーもかかります。いまから100年後200年後のあるべき姿としてはアクティビティを減らさないといけません。栗本先生がおっしゃったように我々の生活レベルを30年前に下げるといのが一つの手かもしれませんが、現実にはここまでできてしまったらできないと思います。そうすると人間の数を減らすわけです。いまの人口は60～70億ですが、いまから200年かけて50億に減らしましょうということを決めます。50億になったとすると、人間の食料生産技術というのは50億だったら十分やっつけられるレベルに全体としてはありますので、あとは社会のダイナミズムをどう維持するかという話になります。生産の部分があって、そこそこ皆が一生懸命技術開発して暮らす世界ができてということになると、経済的にいうと金余り状態になるわ

けです。それを使わないとアクティビティが継続できませんから、例えばどうやって無駄に金を使うかというのが究極のサステナビリティの議論になります。余暇をどう使うとか、どうやって遊ぶとかかそういうことを考えないとサステナビリティ、サステナブルな世の中ではないようになるわけです。

例えば地球のもっているぎりぎりの生産能力のところ人間が生きるというのは、ちょっと針がふれただけでおかしくなるわけですからサステナブルではないわけです。そんな世の中ができるかといったら、実際にみないといけません。何かかという、アフリカの資源もないいまの時点で教育もないし、こんな議論をやってくださいといったら何にも理解してくれないような自分たちのところで非常に幸せに生きているような社会がある一方で、アメリカみたいな社会があるわけです。その途中にいろんな社会があってバランスをどうとっていくかというのは全体のマスを考えて、こうやれば地球全体のサステナビリティができますよといったのにやっぱできないわけです。だから個別にローカルにみていてそれぞれのところで自分たちが生き延びていくための楽しく生きるためのいろんな知恵というのをつくっていかないといけないのです。さっきから私どもが進めているダイバーシティを大切にすることにつながっていくというお話だと私は思っています。

本当に大きな枠組みとしては長期的にどうやって人口のあるところにおさえようとかかです。そういうのは非常に大事な話になると

思うんですが、ただそれを具体的にやろうとしたときに個別の議論というのは、大きな議論がある一方でローカルにそういうセンスをもった人が、とりあえず自分の現場でどう考えるかということを考えていかなないとできないんじゃないかと思っています。

宮本 ありがとうございます。

小泉 個別にローカルにみていく。個別な議論は現場から進めていく。それがまさに私たち人類学者がもっとも重視しているアプローチです。この部屋には密かに人類学者がたくさんいて、私を含めて栗本先生、住村先生、思さん、たぶん峯先生も我々に相当影響されてしまったんじゃないかという気がします。つまらないことなんですけれども、お配りになった資料の中に文理融合の必要性という図を味埜先生につくらせていただいている、この右側に倫理学、宗教学、医学、心理学、哲学など主に人文科学がはいっていて、左は法学、政治学、経済学、社会学、経営学となっていて、もうおわかりだと思いますけれども、ぜひいれていただきたいのは人類学です。といいますのは先生がおっしゃっていた視点が非常に人類学的で、たびたび共感しましたので。(笑)

宮本 他に。

渡邊淳平 渡邊淳平です。所属は大阪大学法学研究科の院生です。ちょっときかせてもらいたいと思うのが、テーマの文理融合ということなんです。一概に文理融合といってもいろいろの意味があると思うんですけれども、一つは味埜先生がおっしゃっていま進め

ていらっやいますように、俯瞰的な視点をもつような学生を育てることです。サステナビリティといった一つの観点から俯瞰的な視点をもつ、そういう教育をするというのが一つあると思うんですけれども、いま大阪大学とかが進めているのは逆に自分の専門性を確立したうえでサステナビリティという観点をもちましようとか、身につけましようということがあると思います。いろんな意味で文理融合を考えると専門性がぶつかるところに新しいブレークスルーとか昇華するところがあると思うんですけれども。文理融合ということばのなかには、単に何かと一緒にになるとか、一つのことを考えて寄り添っていくというのではなくて、文系、理系のなかでも大きく価値観の違う人たちが自分のもっている考えを持ち寄りとなったときに、対立とか考えによってはぶつかりあがあると思うんです。そういう場を提供するという意味でも文理融合ということはいえると思うんです。

そのなかに新しく何か生まれてきたり、そういうものにさらされて自分の専門性であったりとか、自分のもっている分野のなかだけの主観ではなくて、全然関係ないところから関係ない視点でやられたときにそれにどう採用するかということに新しい進展や進歩があって、それを生み出そうとしたときに、今後文理融合を進めていこうとなったときに、いまの流れでどういうふうな方向性でどういうふうなものを目的にするのか、なかなか難しいかもしれませんが、ちょっと方向性を示してほしいところがあります。今後ここで教

育された人間がどういうフィールドでどういう役割で社会で活躍するところを目的にするのか。いまおられる研究者の方々に指導してもらってその研究者同士でどういうふうな融合と。一人の研究者に違う分野をやってもらいます。学生だったらできるかもしれないですけど、その道で頑張ってきた人に別の分野をいまから勉強しろといったって無理だと思うんです。どういうふうに集めて新しいものをつくりだすのか、そういうふうな方向性について具体的な話があればおききたいなと思うのですが。

宮本 プログラムからいきますと閉会の挨拶ということになっているんですが、ただいまのご質問に対する答えも含めてセンター長の方から。

栗本 いまのご意見は非常に正しいもっともな意見だと思います。ですから融合がフュージョン、一つになるという意味だとしたら、文理融合ということはあまり適切なことばではありません。それぞれの人が自分の専門領域をしっかりふまえながら、専門の枠のなかにとどまるのではなくて、他の専門の人と、批判も含めてオープンに議論していくことです。このことが大事ではないかと思えます。

峯先生が指摘された問題ですが、新しい研究科ができたときに、学際的で文理融合のものになることが多いんです。それぞれの教員は旧来の専門性をふまえているわけなんですけど、入学してくる学生さんには新しいものが要求されているわけです。多くの場合教育研究の実態が曖昧で、皆さんがアイデン

ティティクライシスに陥り、新しい研究領域をどうしたらいいのか悩みます。難しい問題で私もどうしたらいいのかよくわかりません。私、司会ではありませんけど、味埜先生、いまの問題について一言で意見ををお願いします。**宮本** それに関連しまして味埜先生がいま所属しておられる新しい大学院の研究系は独立して定員をおいて教員を集められたのか、あるいはいま話にできていますように、いろんなところに足をのいた先生方を寄せ集めておられるのか。そこで基本的な性格が大いに変わってくると思います。

味埜 東京大学の新領域創成科学研究科というのは99年にできているんですけれども、これは東京大学のなかのいろんな学部、専攻、研究科から参加していただいているんですが、完全に足抜けして定員をうつしてやっています。入学試験、カリキュラム、教務関係全部が独立した研究科としてやっています。環境学のなかでも私がいる社会文化環境学というのは、出身でいうと建築学が4人、都市工学が3人、文学部が3人、これは倫理の先生と歴史考古学の先生と社会学の先生です。つまり都市のフィジカルな面と、文系の面と両方みていこうということでできていて、ずっとプロセスをみていきますと、最初はおっしゃったように学生さんは新しいものを求めてはいつてきて、それに対して教員がそれに追いつかないという事態が現実にあって、いまでもそこから抜け出していない側面もあるんですけれども、例えば1年に1回宿舎するとか、毎回お互いの情報交換するためのセミ

ナーというのは半分酒飲み会なんですけど、学生さんも含めたそういうものやっています。結果として具体的な研究のレベルのコラボレーションというのもいくつか具体的な例ができています。10年ぐらいかかってやっとそういうことになるのかなという気がしています。

融合というのが一つになるという意味では融合ということばをつかってはおかしいと思うので、ここでいっている融合というのはお互いに入り込むことです。私の話のなかでも申し上げましたが、個人レベルの融合と、集団としてなにか問題を扱うときの融合というのは両方あると思って、個人がコミュニケーションをとるにしても分野が違くと全然ちがうとか、相手がどういう発想方法で考えるかということを理解していないと一緒に仕事することができないというのがありますので、個人レベルで相手に近づこうとする努力、あるいは少なくとも間口を広げておこうという努力というのは絶対に必要で、それがないと融合にならないと思います。最終的に新しいシステムをつくっていくときに例えばどこかの専門性が一つあればそれでできてしまうということがほとんどいまはないわけで、結局チームで働くことになるわけですから、チームで働くときの一番チームワークの発揮されるというのが、学融合ができていない状態、学ではないかもしれませんが、こういうことを目指すマインドを持った技術者と制作者と研究者がチームを組んでやるというのが理想なのではないかと思えます。いろんなレベルの

リーダーというのがいますので、いろんなレベルの人に対してそういうマインドを備えてもらう教育をしたいというのがサステナビリティ学教育といっているものの目指すところではないかと思っています。

宮本 ありがとうございます。

思 僕も発言させてもらいたいのですが、よろしいですか。

僕は山形県の農民の話がたいへん興味深かったのをそれをまず紹介したいと思います。山形県でニワトリを養殖している農家の方がいらっしゃって、普段はスズメがよくくるんですけども、そのニワトリが追い払っちゃうんです。エサをとりに来ます。吹雪のなかでは追い払わずに、ニワトリが先に食事をして、終わったらスズメが食事をして、そして帰るという話です。この話が私たちに投げかけた問題ですが、要するに人間と自然というのは、私たちアジア人はおそらくそれを輪だと考えているんじゃないかと思うんです。一つの循環システムです。その循環システムがちょうど人間のところでびたっと切れちゃったと思います。僕たちを含めて本当の持続あるいは輪とは、ある意味では人間の持続ではないかと思えます。つまり、人間自身の対立が人間と自然との関係に大きく影響しています。ニワトリの行動が示していることを学んで将来への展望をしたいと思えます。つまり、持続可能なシステムを構築すると同時に人間の安全保障を考えるということです。これは個人的な感想になりました。

栗本 思先生ありがとうございます。すべ

での新しい教育というのはチームワークで成り立つ、それは私も同感なんです、次の問題はチームのサステナビリティをどうやって維持するかということだと思えます。きわめて個人的な関係をひきずっているわけですから、メンバーを交代していくときにどう継続していったらいいかというのが次の問題だと考えさせられました。

本日は皆さんたいへんありがとうございます。繰り返しになりますが基調講演をいただいた、味埜先生にお礼申し上げたいと思います。大阪大学内部の先生方、石井先生、住村先生もありがとうございました。最後になりましたけれども、参加していただいた皆様方にもお礼申し上げたいと思います。

最初に小泉副学長の方から説明がありましたように、このワークショップは文理融合研究戦略ワーキンググループのワークショップです。もう一つ文系の研究戦略ワーキングというのがございまして、それは私が世話役をさせていただいているんですが、どちらも大阪大学のさまざまな部局、研究科の枠をこえて教員と院生が対話をする場をつくらうというのがまず第一の目的であります。こういった試みは来年度以降、私どものGLOCOLで引き継いで対話の場を維持して発展させていくことになると思いますので、また皆さん機会がありましたらぜひご協力ご参加いただきたいと思います。今日はたいへんありがとうございました。

* ここでいうワークショップとは、2007年2月、大阪大学サステナビリティ・サイエンス研究機構(RISS)によって開催された「安全と安心の科学を目指して—文理融合に基づく人間の安全保障研究—」のことで、報告書をご希望のかたはGLOCOLまでご連絡ください。

文理融合研究戦略ワーキング・ワークショップとは

第1回ワークショップは、ワーキング委員を通じて発表希望を募り、さまざまな部局や分野から29件のプロジェクトが集まった。ワークショップは学会形式で行い、それぞれ15分の持ち時間で報告を行い、ワークショップ終了後に情報交換の機会を設けた。たいへん過密なスケジュールだったが、多数の参加者を得て充実した内容となった。

このワークショップ後の総括において、第1回に発表されたものの以外にも報告されるべきプロジェクトがあることが指摘された。そこで全学の部局長を通じて周知して「文理融合研究の展望2」の発表希望者を募り、第2回のワークショップを2006年12月17日(日)に大阪大学中之島センターで開いた。第1回と同じように学会形式を採り、10件の報告の後、情報交換を行った。

注)以下の所属・肩書きは開催当時のもの

文理融合研究戦略ワーキング第1回ワークショップ 「文理融合研究の展望」

日時:2006年3月11日(土)9:50-18:45

場所:千里ライフサイエンスセンター

司会:小泉潤二(人間科学研究科教授)

盛岡 通(工学研究科教授)

サステナブルサイエンスと環境リスク管理

堤 研二(文学研究科准教授)

「環境ガバナンス」ほかについて

鳴海邦碩(工学研究科教授)

美しい風土づくりに関する文理融合研究風土学の構築

澤木昌典(工学研究科教授)

環境ガバナンス(トータル・アメニティ・マネージメント)と安心安全社会

新田保次(工学研究科教授)